

# 遅延と労力に関わる

## セルフコントロール行動の増加方法の検討

立命館大学大学院応用人間科学研究科

対人援助学領域 障害・行動分析クラスター

井籐 和之

本研究は、遅延と労力に関するセルフ・コントロール行動に対し、それぞれの訓練がもう一方に関する行動を増加させうるのかを調査した。本研究における「セルフ・コントロール」とは、一定の遅延もしくは労力とともに大きな強化子が随伴する行動と、遅延も労力も無く小さな強化子を随伴する行動との二通りの行動のうち一方を選択する場面において、大きな強化子を随伴する行動を他方より高率で選択する状態を意味するものであった。

選択行動の反復において、遅延や労力の基準を徐々に引き上げるものを訓練とし、労力として2つの数の和を答える課題を用いた。実験は、第1査定、第1訓練、第2査定、第2訓練、第3査定の順で構成され、それぞれ遅延と労力の2条件があり、査定は両方一組として3回、訓練は片方ずつ順に1回であった。実験協力者は大学生・大学院生8名であった。

5名の結果が遅延条件の訓練から労力についての選択行動への般化の可能性を肯定し、否定する結果は1名だけであり肯定する側と比較すると程度も弱いものであった。したがって、遅延についての訓練から労力についての行動への般化はある程度存在すると考えられた。

労力条件の訓練から遅延についての選択行動への般化は2名の結果が肯定し、否定する明確な結果は無かった。つまり、労力についての訓練から遅延についての行動への般化は存在しないか、あるいは遅延から労力へのものと比較し弱いものだと考えられた。